六本木未会議

デザインとアートと人をつなぐ街に





CREATOR N° 142

吉本英樹 Hideki Yoshimoto

1985年和歌山県生まれ。2010年東京大学大学院修士課程修了(航空宇宙工学専攻)。同年に渡英し、2016年英ロイヤル・カレッジ・オブ・アート博士課程修了(Innovation Design Engineering専攻)。2015年にデザインエンジニアリングスタジオ「Tangent」設立。デザインとテクノロジーを融合させる手法でさまざまな作品を発表し、世界的ラグジュアリーブランドにも多くのデザインを提供。日本人工知能学会全国大会優秀賞、IPA未踏ソフトウェア事業スーパークリエーター認定、Lexus Design Award、Red-dot Design Concept Best of the Best、和歌山県文化奨励賞など、デザインと工学の両分野で受賞多数。2020年、東京大学・先端科学技術研究センター特任准教授に着任し、先端アートデザイン分野を共同設立。ロンドンと東京をベースにさらに活動の幅を広げる。

武井祥平 Shohei Takei

1984年岐阜県生まれ。高専で電気工学、大学で認知心理学を専攻。2012年東京大学大学院情報学環・学際情報学府修士課程修了。同年、「nomena」設立。工学的な視座から前例のない表現の可能性を追求する活動を展開。自身の創作活動の他、気鋭のアーティストやデザイナーとの共同制作、テクニカルディレクションも数多く手がける。 主な仕事に、東京2020聖火台主任機構設計者、セイコーとの共同制作による作品シリーズ「時計の捨象」、宇宙航空研究開発機構JAXAとの共同研究「スピン型ソーラーセイル形状制御装置」、21_21 DESIGN SIGHT「ルール?展」への出品作「四角が行く」 他。主な受賞歴に、文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞(2022)、Penクリエイター・アワード(2021)、DSA日本空間デザイン賞金賞(2017)、東京都現代美術館ブルームバーグ・パヴィリオン・プロジェクト公募展グランプリ(2012)、東京大学総長賞(2012)他。



published_2022.12.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

東京オリンピック・パラリンピック聖火台の機構設計を担当した、nomenaの武井祥平さんと、ロンドンと東京を拠点に活動し、仏「エルメス」等の世界のラグジュアリーブランドにデザインを提供する、Tangentの吉本英樹さん。同世代の2人は、エンジニアリングをベースにしながら、デザインやアートの分野で活躍している共通点があります。そして今年のクリスマスシーズンは六本木と名古屋、それぞれの地で手がけたツリーが、街を華やかに演出しています。エンジニアとして幅広い表現に取り組むことの強み、そしてこだわりを多角的に語り合っていただきました。

カルチャーショックを受けたロンドンの制作環境。

武井祥平 実は吉本くんとは学生時代、「i.school」という東大のプログラムでニアミスしているんです。

吉本英樹 ちゃんと話すようになったのは、お互いに独立して、ミラノサローネで会うようになってからですよね。

武井 2016 年に僕が仕事でロンドンに行ったとき、吉本くんのスタジオに遊びに行ってしこたま飲んで、終電を逃して泊まったこともありました(笑)。

吉本 スタジオの庭にテーブルを出して、飲みましたね。

武井 そのときの経験がカルチャーショックだったんです。吉本くんは大きなスタジオを持っていて、そこではいくつかのプロジェクトが同時進行していた。RCA(ロイヤル・カレッジ・オブ・アート)からのインターンも何人かいて、すごく活発なスタジオという印象を受けました。あのスタジオは、もともと修道院の宿舎だったんですよね?



Tangent スタジオ

修道女の宿舎として使用されていた 30 部屋ほどある 建物を、スタジオとして利用。

吉本 そうなんです。ロンドンの中心から離れたところにあるレンガ造りの大きな建物を、スタジオとして使わせてもらっていました。

武井 僕も頑張らねばといい影響を受けて、その後、東京で広めのスタジオに引っ越しました。 吉本くんのおかげです。



nomena スタジオ

東京・浅草にあるオフィス、ギャラリー等の機能を備えたスタジオ。空間の設計は DOMINO ARCHITECTS が担当。

吉本 武井さんは多くの人から信頼を得て、スケールの大きいものをたくさんつくっていますよね。ビジョンがしっかりあって、職人という感じがするし、それでいてクリエイティブ。いろんなことを実現させるには、たしかに広いスペースが必要かもしれない。

街を彩るクリスマスツリーに込めた思い。

吉本 僕は去年、六本木ヒルズのウェストウォークに飾るクリスマスツリー《BON-BON BLOSSOM》の制作を担当しました。コロナ禍で売れなくなり、廃棄される予定だった花をドライフラワーにしてツリーをつくったのですが、今年は名古屋にあるミッドランドスクエアでジャングルジムのツリーを制作しています。クリスマスツリーは数週間、街をハッピーに演出してくれますが、12月26日の0時を回ると一気に解体されて、ゴミ箱行きとなります。そこから街はお正月ムードに一変する。SDGs やサステナブルがこれほど声高に叫ばれているのに、矛盾していますよね。今回のツリーはクリスマスが終わったら、名古屋市内の3カ所の保育園に、本物のジャングルジムとして寄贈されることになっています。仮にそれぞれの場所で数十年残り続けて、「このジャングルジムは、実は2022年のクリスマスにね……」と話題にのぼるようなことがあったらいいなと思って。ツリーには照明のオーナメントが100個ついているのですが、それらは解体時に回収して、お客様に抽選でプレゼントすることになっています。



ジャングルジムツリー

大小さまざまな立方体フレームを積み重ねた、名古屋ミッドランドスクエアのクリスマスツリー。フレーム部分は、愛知県の体育器具・遊具メーカー「TISWELL」に制作を依頼。解体後、子どもたちの遊具として実際に使えるよう、安全性も確保している。2022年12月25日まで展示。

武井 僕は、nendo さんがデザインした東京ミッドタウンのクリスマス館内装飾《Glitter in the air》のクリスマスツリーのエンジニアリングを手伝っています。それと、吉本くんが去年担当した六本木ヒルズ・ウェストウォークのツリーを、今年は WOW さんが手がけているのですが、そのエンジニアリングにも携わっています。なので光栄なことに、六本木エリアのクリスマスツリーを裏側で支える存在になっています(笑)。といっても、クリスマスツリー制作に関わるのは今年が初めてで、とても新鮮な体験でした。吉本くんが言ってくれたみたいに、エンジニアリングという職人的な関わり方なので、まず安全につくることに注力しました。また、普段から、自分たちが関わる作品に「力み」が感じられるものにならないようにも意識しています。表現が際立って見えるのが理想というか、軽々と品の良いことをやっている印象になればいいなと思っているんです。



Glitter in the airのクリスマスツリー

東京ミッドタウン・ガレリアB1にて飾られるnendoによるクリスマスツリー。高さ7.5mの円錐形のツリーとなっており、約400台のファンによって生み出される風により、光のパーツがキラキラと輝く。風は複数のパターンで吹き、螺旋状に上昇したり、波紋のように広がったりとさまざまな表情を見せることで、クリスマスの高揚感を演出。



Reflective tree

2022年、六本木ヒルズ・ウェストウォークに飾られるクリスマスツリー。WOWがデザインを担当。光の反射と拡散を用いて、冬の美しい煌めきを演出。



published_2022.12.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

人が行き交う場所に作品を展示する価値と責任。

吉本 クリスマスツリーを設置するのは、いろんな人が行き来する、パブリックな場所です。 もしかしたら、なかにはコロナ禍で家族を亡くした人もいるかもしれない。ユニークで新しい 表現を模索することは、自分に課せられたミッションとして当然ありますが、同時にメッセー ジやコンセプトでは、社会の流れに寄り添うことを大事にしたいと思っています。

武井 展示する場所を問わず、エンジニアの立場として思うのは、社会に対してマイナスになるようなものはつくりたくない、ということです。工学系を専攻すると、「技術者倫理」といってエンジニアたるものは何を考えて、倫理的に技術をどう発展させていくべきかを学びます。そんなふうにテクノロジーの発展が社会にとってマイナスになっていないか、という意識を常に持って仕事をしていますね。特に AI やロボティクスの分野が加速度的に発展しているので、人間の存在意義をしっかり考えないと、本当に目的を見失いかねない状況だと思います。

街に置かれる作品として目指しているのは、その街の「誇り」になること。僕は表現に関わるものづくりを通して、人の思い出に残るモニュメント的なものを主に手がけているのですが、即座に役に立つようなものはそれほど多くない。それでも、誇りを持ってもらうことはできると思うんです。例えばフランク・ゲーリーが設計したビルバオ・グッゲンハイム美術館は、計画時には、景観を壊すとか、お金の無駄だとか反対が多かったそうです。だけど、完成して多くの人が訪れ、ポストモダンの重要な建築になることで、捉えられ方も変わった。文化的な意味を持つ作品は、効果が直接目に見えにくかったりしますが、やっぱりそこに住む人たちや訪れる人たちに、喜ばれるものを生み出したいという気持ちが常にあります。



ビルバオ・グッゲンハイム美術館

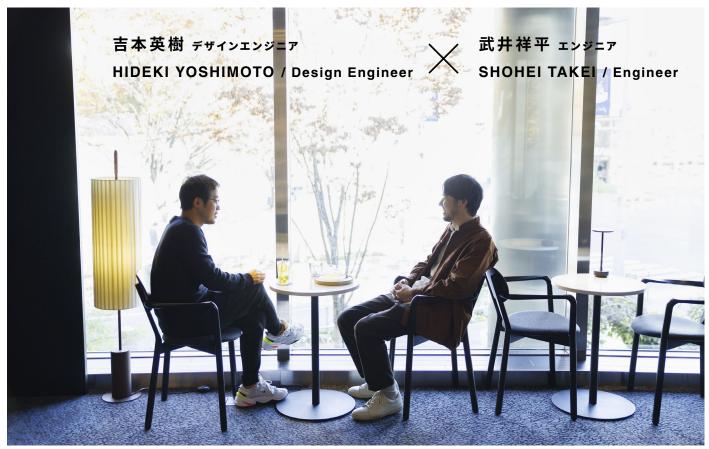
スペイン北部、バスク地方の都市ビルバオに、モダンアートの発信地として1997年に開館。アメリカの建築家フランク・ゲーリーが設計を担当。最も重要な現代建築のひとつといわれている。

クリエイター目線からテクノロジーを捉える。

吉本 Tangent は 2015 年に創業して、エンジニアリングとデザインの両方を行き来するような活動を標榜してきました。ただし最初の5年くらいは、テクノロジーとはいいつつ、最先端のテクノロジーを使っているわけでもなく、どちらかというと表現が前面にあって、裏でプログラミングが少し走っていたり、センサーがついていたり、というスタイルが多い状況だったんです。

武井 nomena もそこは一緒ですね。テクノロジーって言葉をそのまま捉えると、最先端だったり、社会を変えたりするようなニュアンスが生まれがちですけど、僕らが扱うものの多くは、むしろ " 枯れた " 技術。身近にあるものを組み合わせて、今まで見たことのないようなものをつくれないかと画策しています。最先端のテクノロジーにも興味はありますが、そういったものを使うとどうしてもドヤ感というか、力みが出がちなので。その辺りは僕らの技術の関わり方のひとつの特徴というか、ほかのエンジニアとちょっと違うところなのかなと思ったりはします。

吉本 僕の場合は、ここ2、3年で潮目が少し変わってきていて。教える側としてロンドンから拠点を東京に移し、東大に戻ってきたことも無関係ではないのですが、ドローンや AI のシステム開発を進めるなど、大学の研究レベルのテックに携わる機会が増えてきました。そういった技術をデザイナー、あるいはアーティストの目線で捉えたとき、科学者やエンジニアでは発想し得なかったアイデアを出せたりするんですよね。それをうまく育てられれば、これまでなかったような需要が生み出せるかもしれない。このタイミングになって、ようやくテクノロジーとデザインの両方をやっているのだと、自信を持っていえるようになったし、それ自体の面白さを感じています。技術をクリエイター目線で違うベクトルから見ることが自分の役割なのかな、と思えるところまでになってきました。効率の良さを目指さなくても、こっちのほうがグッと来るし、気持ちいいよねっていう感覚を大事にしています。



published_2022.12.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

テクノロジーとデザインが出会うところ。

吉本 自分のプロジェクトで記念碑的になっている作品が、デビュー作の《inaho》です。すでに発表から 10 年近く経ちますが、今年の六本木アートナイトでも展示があったりなど、いまだに褒めていただける作品です。こうしたインスタレーション作品も手掛けますが、最近は、まちづくりの相談など、もう少し長いタイムスパンの依頼もいただくようになってきました。



inaho

風で揺れる稲穂にインスピレーションを受けた、インスタレーション。人が前を通るとセンサーが感知し、止まっていたオブジェが光って揺れ始める。2013年に、第1回 Lexus Design Awardを受賞。画像は、「六本木アートナイト2022」で展示された際のもの。

TANGENT INAHO

今、力を入れたいと思っている分野は、伝統工芸です。きっかけのひとつとなった案件が、高野山の恵光院という宿坊に制作した「月輪」という金箔の壁面アートです。スイートルームの床の間を飾る横幅7 m ほどの作品を、金沢の金箔ブランド、箔一さんと一緒につくりました。恵光院は1,200年もの歴史があるのですが、宿坊では数百年前の襖や調度品が、ショーケースに入れられることなく今も普通に使われているんですよ。仏教の時間の流れの緩やかさを実感するし、この作品ももしかしたら襖のように200年後、300年後も存在し続けるかもしれない。人間の寿命を超越した時間の流れで動いているものごとを、デザインやテクノロジーとかけ合わせたら新しい領域を生み出せる気がしています。



月輪

2001年、高野山の宿坊「恵光院」の特別室に制作された、金沢箔の壁面アート。「月輪観」という真言密教の 瞑想法に着想を得た作品で、真円から湧き上がる金箔 の渦を壁面いっぱいにあしらい、別の次元に広がって いくような景色を表現。

武井 僕はやっぱり「誇り」を生み出すことを意識してものづくりをしていて、東京オリンピック・パラリンピックの聖火台はまさに象徴的で、国を代表するようなものに携わらせてもらったこと自体が、ラッキーだったと思っています。あれだけ大きな、意味のあるものをつくる過程ではステークホルダーも当然多く、いろんな物事を慎重に進めていかなければなりませんでした。とにかく「これぞ日本」とか「日本でなければつくることができなかった」と思えるものにしたかったんです。もちろん、nendo さんのデザインの素晴らしさによるところが大きいのですが、ほかにも外装パネルにはトヨタさんの世界最大級のプレス機が使われていたりして、日本のものづくりの結晶といえるものになっています。そこに僕も、機構設計という立場で関われたことは、大きな経験となりました。



東京オリンピック・パラリンピック聖火台

太陽をモチーフにnendoがデザインを担当。nomena が機構設計を担当し、10枚の外装パネルが花びらのように開いて中心に火が灯る、スムーズな動きを実現。 写真: Hiroshi Iwasaki



published_2022.12.7 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

最近はエンジニアリングの技術的なお手伝いだけでなく、自分たちの表現を作品にする仕事も増えています。セイコーさんの「時計の捨象」シリーズは、スマホで時間を確認する人が多くなるなか、こうした手触り感のある機械が今なお存在していることの貴重さに注目した作品。時計が時間を刻む役割を忘れたとき、どういう振る舞いをして、どういう印象を醸し出すのかを想像して制作しました。嬉しかったのは、セイコーのエンジニアやデザイナーの方々が、「時計をつくり続けている我々には思いもつかなかった表現だ」と言ってくれたこと。彼らが気づかなかった時計の面白さや魅力、それこそ誇りにアプローチできたのかな、と個人的には思っています。



時計の捨象

自在で滑らかな針の動きを実現した、SEIKOの腕時計・メトロノームウオッチの内部機構(ムーブメント)と、音で時間を知らせる音声デジタルウオッチを活用した、3作品で構成されるインスタレーション。2022年10月、原宿にオープンしたセイコーウオッチの情報発信拠点「Seiko Seed」の企画展「からくりの森」で展示された。

どんな変化も許容してくれそうな、六本木の自由度。

武井 世界中の都市が似た印象になってきているのは、グローバリゼーションの流れとして必然なのかもしれませんが、街に住んでいる人や、日々そこに通う人たちが、いかにその地に誇りを持てるかが大事ですよね。建築でよく使われる「バナキュラー」という言葉があるのですが、「土着性」「その土地固有の」という意味を持ちます。その土地らしい素材を使った建築は、面白いと思えるポイントが多いし、愛着も湧きやすい。なにより、経済的にも環境負荷的にもコストが低い。建物に限らずバナキュラーを意識したものが、街に増えるといいですよね。

吉本 今の話に通じるかわかりませんが、僕が博士号を取るとき「リズム」をテーマにしたんです。反復とか、寄せては返す波とか、季節が巡るのもそうなんですけど、それ以来ずっとリズムという現象が自分の視点の根底にあって。何が言いたいかというと、人間関係も仲良くなったと思ったら、ケンカして仲直りして みたいなことを繰り返しがちだし、イギリスの EU 離脱やさまざまな国で見られるナショナリズムの台頭も、長いスパンで見れば行ったり来たりのリズムがあるのかもしれない。同様に都市のあり方も、高度成長期のように都会に人が押し寄せた時代を経て、地方創生の概念が生まれ、一極集中はダサいみたいなムードが広がり、地方で好きなことをやるのがクールに思えてきたりする。なので都市が抱える課題を考えるときも、少し引いた視点から長い時間軸を意識することで見え方が変わるかもしれない。

アジアの街はヨーロッパと比べると都市計画が乱雑というか、好き勝手な建物を好き勝手な場所につくっている印象がありますよね。 六本木もある意味アジアらしさを色濃く感じる街で、高層ビルがドーンと存在しつつ、その周りには小さい店や路地、昔ながらの住宅もあったりする。 この街並みが 50 年後、どう変わっているのか予想するのは難しいかもしれないけれど、どう変わったとしてもそれを許容してくれそうな自由度を感じます。

エンジニアリングを用いて、歴史・文化を分析する。

吉本 六本木を舞台に何かプロジェクトをするとしたら、それこそ六本木をよく知っている、この土地に代々住んでいるような人を巻き込みたいですね。

武井 たしかに僕らの世代にとって六本木は、新しくてきらびやかな街というイメージがありますが、バナキュラー (=土着的なもの)を意識して歩いてみると、乃木坂とか閻魔坂みたいな、歴史を感じさせる地名が多い。華やかさに隠れて、ひっそりと目立たなくなっている部分ですけど、より深い六本木の魅力に迫れるような取り組みがあったら、携わってみたいですね。

吉本 地名の話で思い出したんですけど、去年、竹村公太郎さんの話を聞く機会があって。 土木学者で国交省の官僚を務めた方なのですが、幕府がどういう思惑で江戸をつくっていった のか、地政学的な分析がとても興味深く、感銘を受けました。土地の歴史を遡っていくと、六 本木がなぜ今のようになったのか、ロジカルに理解できるかもしれない。

武井 竹村さんの本は僕も読んだことがありますが、土木知識を使って歴史を読み解く手法が面白い。戦の話とかでも、通説とされる攻撃ルートは土木的に考えると攻めにくいから、違うルートだったのかもしれないと仮説を立てたりして、エンジニア視点に通じるものがある気がします。





日本史の謎は「地形」で解ける

なぜ京都が都になったか、などをインフラの視点から読 み解く竹村公太郎による歴史書。

吉本くんは僕と一緒で文化への眼差しを持っていて、エンジニアとしてはちょっと珍しいタイプ。 僕は古典芸能の浪曲が好きで、いろんな人にその話をするんですけど、大抵みんな聞いてくれない(笑)。でもロンドンで会ったときに吉本くんにその話をしたら、興味を持ってくれましたよね。"エンジニアリング文化"という切り口で、何か一緒にできたら面白そう。

吉本 武井さんと僕は、受けた教育も近いものがあるし、スキルセットとしてはすごく似ているところがあると思います。アウトプットしているものも、外から見たら似ているかもしれないけれど、本人的には違いも結構自覚している。だから例えば、お題は同じで、それぞれ別で取り組んでみたりしたら、その違いが具体的に見えてくるかもしれない。

武井 表現する人間がエンジニアリングを知っていると、思いついたアイデアをすぐに試しながら軌道修正できるので、個人的に大きな武器だと思っています。その点、吉本くんは僕と似たような方法論を持ちながら、違う視点を持っているのが興味深い。誰かにお題を与えてほしいですね(笑)。

撮影場所: 六本木 蔦屋書店

取材を終えて

"同じジャンル"として捉えられることが多いであろう2人。一緒に仕事をしたことはないものの、プライベートでも親交があり、武井さんが吉本さんの作品設営の手伝いをしたこともあるそう。同世代でスキルセットが近いだけに、共通言語、さらには語らずともわかり合える部分が多く、それでいてお互いの違いや強みも客観的に理解している印象を受けました。だからこそ、同じお題でものづくりをすることに興味が湧いたのでしょう。ぜひ実現してほしいです。(text_ikuko hyodo)